

編集後記

近年、免疫チェックポイント阻害剤やiPSをはじめとする再生医療が現実のものになり、あるいは、なりつつあり、これまで治療法がなかった難病の患者さん、通常療法では治らないがん患者さんなどにとっては医療の進歩が実感できるようになってきました。しかしながら、これらの新しい治療法はこれまでなかった種々の問題も引き起こしています。すなわち、非常に高価であるため、この医療費をどのように支えていけばよいのか。また、その安全性については未知の部分も多く、どこまでリスクを回避できるのかなどの問題です。これらを解決するためには、医師だけではなく、医療の現場にかかわるすべての人々の知恵と努力が必要とされています。

これまで、神戸市立病院紀要には医療現場のベテラン医師からコメディカル、事務、社会保険関係など多岐にわたる職種の方々からの研究報告が投稿されてきました。それらは新しい視点や、従来見落とされがちな問題を提起しており、医療現場における協業の必要性を示すものでした。

今回の神戸市立病院紀要第55巻も色々な興味深い投稿が集まりました。

まず初めに、日本心臓外科診療についての総説です。近年の日本の心臓外科が世界のトップレベルにまで発展してきた様子を詳しく説明いただいた非常に興味深い論文です。

次に、症例報告が3件あり、1件目は血漿交換まで行っても改善しない、難治性血小板減少性紫斑病に対するリツキサンの効果についての報告です。著効例と間に合わなかった例

についての考察は、今後の指針制定に向けてよい情報提供となりそうです。2件目は極めてまれな嚢胞内腫瘍を呈した乳腺葉状腫瘍の1例で、異型性から悪性への境界にある腫瘍の貴重な症例です。3件目は同じく極めて珍しい病態でありながら迅速に診断治療を行えた症例で、副甲状腺がん治療後のHungry bone syndromeについての報告であり、同様の疾患の治療において非常に参考となるものです。

更に今回も医療現場関連部署より2つの研究報告がなされました。1つはセカンドオピニオンについて健常な大学生にアンケート調査を行い、日本にはまだまだ浸透していない治療の自己選択、決定権についてどのように進めていくべきかのヒントになるものでした。2つ目は産科的救急患者に対する緊急輸血の対応についての報告です。異型輸血などの医療事故を防止しつつ、超緊急時の救命のための輸血についての検証であり、医療安全と救急救命との両立についての良い例でした。

いずれの論文も大変貴重で読み応えのあるもので、今後の多種職協業による医療の質の向上が期待されました。

お忙しい中、論文や業績を投稿していただいた医師、職員の方々、膨大な編集業務にご協力いただいた事務局の皆様から心から感謝申し上げます。

先端医療センター 細胞治療科
橋本尚子